

## 215 $^{99m}\text{Tc-PYP}$ 心筋シンチ上で右室梗塞の合併を思わせた下壁梗塞例の検討

吉田 宏、安田鉄介、松尾定雄、金森勇雄、中野哲（大垣市民病院、特放） 柴田哲男、佐々美己（同、一内）

今回我々は、 $^{99m}\text{Tc-PYP}$  心筋シンチにて右室梗塞の合併を思わせた下壁梗塞例について、通常の下壁梗塞と比較検討したので報告する。対象は、ECGにて急性下壁梗塞所見を示し、本法を発症後8日以内に施行した38例である。〔結果及び結語〕(1)急性下壁梗塞38例中右室梗塞合併例(RV(+))群14例(36.8%)非合併例(RV(-)群)24例(63.2%)であった。(2)血清酵素(P-CPK, P-LDH<sub>1</sub>)はRV(+)(群)がRV(-)群に比し有意に高値を示し( $P < 0.01$ )、P-CPKは全例が1000IU以上、P-LDH<sub>1</sub>は600U以上であった。(3)TL心筋シンチより算出したTL scoreにおいて両者間に有意差は認められなかった。(4)冠動脈造影所見では、RV(+)(群)がRV(-)群に比し、右冠動脈のより近位部での狭窄が認められた。(5)RV(+)(群)において、右室梗塞の強い集積を見た描出度(+)の症例は14例中5例(35.7%)あり、全例が本法を発症後72hr以内に施行した梗塞心筋量の多い症例(P-CPK>1400IU)であった。本法にて右室梗塞の合併をより正確に検出するには、発症後比較的早期に施行する必要があると思われた。

## 217 Perfluorochemical Blood(人工血液)とL-carnitineが心筋梗塞範囲に与える影響

渡辺 健、内藤雄一、池部伸彦、赤羽伸夫、小林泰彦、阿部俊也、永井義一、山沢靖宏、伊吹山千晴（東京医大、2内）、村山弘泰（同大、放）、蜂谷哲也、佐々弘（同大、2病理）

〔目的〕本研究では、Perfluorochemical Blood(以下PFCと略す)及びL-carnitine(以下LCと略す)が心筋梗塞範囲にいかなる影響を与えるかについて検討した。〔対象並びに方法〕8~12kgの雑種成犬33頭を使用し、心筋梗塞は左冠状動脈を結紉し作成した。内訳は、冠状動脈を結紉したのみの群(結紉群)、結紉後に7日間LCを連続投与した群(LC群)、結紉後にPFCのみを3日間投与した群(PFC群)、そしてPFCとLCを併用投与した群(併用群)である。梗塞範囲は摘出心の $^{99m}\text{Tc-PYP}$ 心筋シンチグラムにより測定した。また病理組織学的にも検討した。

〔成績並びに結語〕梗塞範囲は結紉群に比較するとPFC群で統計学上有意に縮小していた。他のLC群、併用群では有意ではないが結紉群に比して縮小傾向がみられた。病理組織学的には、梗塞病巣の状態は略々梗塞範囲に準じた所見が得られた。

## 216 Coenzyme Q<sub>10</sub>とPerfluorochemical Blood(人工血液)が心筋梗塞範囲に与える影響に関する実験的研究

池部伸彦、内藤雄一、渡辺 健、赤羽伸夫、小林泰彦、阿部俊也、永井義一、山沢靖宏、伊吹山千晴（東京医大、2内）、村山弘泰（同大、放）、蜂谷哲也、佐々 弘（同大、2病理）

〔目的〕本実験ではCoenzyme Q<sub>10</sub>(CoQ<sub>10</sub>)とPerfluorochemical Blood(PFC)が心筋梗塞範囲の拡大阻止にいかなる効果を有するかを、病理組織所見とも併せて検討した。

〔対象並びに方法〕33頭の雑種成犬を用い、慢性心筋梗塞犬を作成し、PFCとCoQ<sub>10</sub>を投与した。梗塞範囲は摘出心の $^{99m}\text{Tc-PYP}$ 心筋シンチグラムより算出した。

〔成績並びに結語〕心筋梗塞範囲は結紉のみの群に比し、結紉後にCoQ<sub>10</sub>を投与した群と、PFC並びにCoQ<sub>10</sub>を併用投与した群で、統計学上有意に、その大きさは縮少していた。共に( $P < 0.05$ )。一方、病理組織学的には、薬剤投与両群では、心筋の変性・壞死・出血の程度はかなり軽度で、肉芽組織の形成も良好であり、その範囲は限局性島状である。また、結紉のみの群では心筋細胞の強い変性、壞死を示す像が残存しており、心筋束間は幅広く粗鬆で浮腫性となり、また、多核白血球を主とする細胞浸潤や広範囲の出血像がみられた。

## 218 運動負荷心ペルスキャンによる左室容量曲線の分析—虚血性心疾患について—

鹿児島大学医学部第2内科  
高岡 茂、片岡 一、大庭利隆  
大重太真男、中村一彦、橋本修治

虚血性心臓病に対し安静及び運動負荷心ペルスキャンを施行し、左室容量曲線よりpeak sys dv/dt、peak dia dv/dt及びpeak dia dv/dtのdia/sys ratioを求め、安静時と負荷時を比較し検討を行つた。

対象は正常对照群10例、冠動脈造影にて有意の器質的病変を有し、安静時左室駆出率50%以上の比較的心機能の良好な虚血性心臓病群16例である。虚血性心臓病群は運動負荷で左室駆出率の増加するA群(8例)と不变もしくは低下のB群(8例)に分けた。安静時と運動負荷時でpeak sys dv/dt、peak dia dv/dtをそれぞれ拡張終期カウントで補正した値と、peak dia dv/dtのdia/sys ratioについて検討した。正常群は全例sys dv/dt及びdia dv/dtは増加し、dia/sys ratioも増加を示した。虚血性心臓病では、dia dv/dtは両群ともに低下した。sys dv/dtはB群では全例低下したが、A群では低下例も増加例もあった。dia sys ratioはB群では全例低下したが、A群では一定の傾向を示さなかつた。